

詩人ということ——キーツの場合

吉 賀 憲 夫

Keats : A Poet

Norio YOSHIGA

Keats regarded Shakespeare as an ideal poet of no character or no identity. He called such a character as "Negative Capability" or simply "poetical character" which loves both fair and foul. Strictly speaking, however, his idea of Shakespeare was not his own but a prevailing theory since the middle of 18th century that Shakespeare was a poet of imagination. S. T. Coleridge and Hazlitt were the advocates of the theory.

It can be said that Keats shared some of the poetical character which Shakespeare had possessed enormously, but he sometimes suffered from a kind of side effect of the character ; an anxiety stemmed from the lack of his own identity.

We know that Keats was very good at lyric but not at drama. Writing drama needs objective mind to see the world as it is and a man as he is. Though his distinction between a poet and a "dreamer" in *The Fall of Hyperion* is very vague, it was a great step for him to understand the relation between a poet and the world. When he was writing two "Hyperion"s, he seemed to understand that poets should be with the world.

詩人ということ

——キーツの場合

吉賀憲夫

詩人とは何か、詩人とはいかにあるべきか、このような問いを正面きって問えるのは、やはり青年の特権なのであろうか。キーツの短い詩人としての生涯においても、常に彼はこの問いを自らに問いかけ、この問いと共に成長し、また満たされぬ心のままローマのプロテストメント墓地に眠っている。

父母を幼い日に失い、母方の祖母に育てられたキーツにとって、子供の将来に大きな心理的影響を与える父親というモデルを欠いたことは、その後の彼の成長に重大な影響を与えたと思われる。彼の成長過程において、規範となるべき父のイメージは家庭内になく、これにとって代わったものは彼にとっては学校という場であり、それはエンフィールドにあったジョン・クラークの学校であった。キーツはこの学校の寄宿生となり、この期間に彼は文学に「目覚める」のである。彼が文学を知ったのは、まさにこのような教育的環境の中であり、その後の彼のひたむきな詩への情熱を支えたのもこの知的風土であったと言えよう。そしてその時彼に大きな影響を与えたのは校長の息子、チャールズ・カウデン・クラークであった。彼はキーツの求めに応じ様々の本を貸し与えた。その中にはエドモンド・スペンサーも含まれていた。彼はまた音楽にも造詣が深く、彼の演奏を通しキーツはモーツァルト等の音楽を知る。『聖アグネス祭前夜』においてポーフイローが耳を傾ける広間の音楽はキーツの学校時代の彼の演奏の記憶であるという。キーツは彼に宛てた書簡詩の中で次のように彼のことを記している。

... you first taught me all the sweets of song:
The grand, the sweet, the terse, the free, the fine;
What swelled with pathos, and what right divine;
Spenserian vowels that elope with ease,
And float along like birds o'er summer seas;
Miltonian storms, and more, Miltonian tenderness;
Michael in arms, and more, meek Eve's fair slenderness.

あなたは私に初めて教えて下さった、歌のあらゆる素晴らしさを、
壮麗さ、華美さ、簡潔さ、のびやかさ、上品さを、
情念に溢れるもの、真に神々しいものを、
軽やかに弾み、夏の海面の上に漂う
鳥のようなベンサーの母音を、
ミルトンの嵐、さらにミルトンの優しさを、
武装したミカエル、そしてさらに柔和なイヴの美しきころもとな
さを。

(『チャールズ・カウデン・クラークへ』 五三―九行)

チャールズ・カウデン・クラークにより導かれ、養われたキーツの文学への愛は、おそらく気まぐれな表層的文学愛好家よりはるかに確固とした信念を彼の内に構築したのであろうし、また同時に彼はより本格的な文学的、また文学史的パースペクティブを掴んだのである。このことは

彼の理想とした詩人達と彼自身の詩作の歴史を重ね合わせてみればよい。そこには英文学史的整合性すら見いだせるであろう。また彼の文学的興味の範疇を振り返れば、そこにも彼が文学における一つの「正統」の流れに連なっていることを理解するに難くない。例えば彼の神話への興味と傾倒がそれである。キーツと神話を論じた研究は数多くあるが、ここではその問題には立ち入らない。ただ確かに十九世紀の産業革命期において神話というものは瀕死の状態にあったのであり、キーツの描くところのギリシア神話風の自然は現実とは随分掛け離れたものであったことは事実であろう。しかしキーツの神話への関心は、彼の文学受容を通して芽生えたのであり、このような彼の文学への姿勢はクラークという良き「教師」に負うところが実に大きいといえよう。

詩を発見した少年は詩人となることに憧れる。彼は決して無学ではなかった。かといって当時のワーズワスやコールリッジのように大学へ行く身分でもなかった。外科医ハモンドのもとで見習いとして働きながらも、その間も読書と文学修行を欠かすことはなかった。一八一六年、彼は英国初の医療国家試験に合格したのだが、ついに詩人としての人生を選択するのであった。

キーツに対する先に述べたクラークのもう一つの功績は『エグザミナー』誌とリー・ハントの存在の紹介であった。キーツはこの『エグザミナー』に幾つかソネットを投稿し、掲載されたのであった。またクラークはキーツを、この才能を発見する天才ともいえる進歩的ディレッタント、リー・ハントに紹介することによりキーツの運命を決定してしまっただけであった。このハントの文学サークルに出入りすることにより、キーツはハズリット、シェリー、画家のヘイドン等を知るに至ったのである。彼はこれらの詩人、評論家、また文学芸術愛好家の中であって、様々な影響を受けて行くのである。

2

詩人キーツは何を考えていたか、幸いわれわれは彼の手紙からそれらを伺い知ることができるのである。彼は実に多くの手紙を書き、好運にもそれらかなりのものがオリジナルや写しの形で現在残っている。そしてそれらは、まさにキーツを知る貴重な資料となっている。その手紙の中で彼は随所にシェイクスピアに対する尊敬と崇拝にも似た感情を吐露している。また彼はキーツが目標と定めた詩人であった事はいうまでもない。ジョン・ミドルトン・マリのように、キーツこそ英文学に於けるシェイクスピアの直系と考える批評家もいるが、確かにキーツの手紙を読む限り、彼の目に映ったシェイクスピアは彼の遠い先祖であったと肯定したくもなるのである。そのような例を彼の手紙から引いてみよう。

... at once it struck me what quality went to form a Man of Achievement, especially in Literature, and which Shakespeare possessed so enormously—I mean Negative Capability, that is, when man is capable of being in uncertainties, mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact and reason—Coleridge, for instance, would let go by a fine isolated verisimilitude caught from the Penetratium of mystery, from being incapable of remaining content with half knowledge.

それは特に文学において偉大な仕事を達成する人間を形成している特質、シェイクスピアがあればほど膨大に持っていた特質のことなんだが、つまりぼくは「消極的能力」のことを言っているのだが、つまり人が不確かさとか不可解さとか疑惑の中にあっても、事実や

理由を求めていらだつことがなくおられる状態のことなのです。コ
ールリッジはそこそこの知識に満足することができないため、不可
解さの最も深いところにあり、事実や理由から孤立しているすばら
しい真実らしいものを逃すでしょう。

(一八一七年二月二七日 ジョージとトマス・キーツ宛)

キーツがシェイクスピアの特質という「消極的能力」とは、理論や推
論で強引に物事の「真実」にたどり着く能力ではなく、またその結論に
安住しそれ以降の思考を停止させてしまうことではなく、事物に対し予
断を持たず、それらを断定的に処理せず、全体の中で相対化し、結論に
到達する一歩手前で試行判断を停止し、結論を留保し、常に新しい環境
の中にその問題を還元し、絶え間なく「思考」することといえる。この
一見優柔不断とも見える思考方法は、近代合理主義の観点からしても、
また近代科学の諸方法からも遠くかけ離れた方法論のように見えるが、
そこがキーツが「特に文学において偉大な仕事を達成する人間を形成し
ている特質」と言う由縁なのである。次の『レイミア』における有名な
一節は、科学的真理探求に対する「文学者」の批判と読める。

Do not all charms fly

At the mere touch of cold philosophy?

There was an awful rainbow once in heaven:

We know her woof, her texture; she is given

In the dull catalogue of common things.

Philosophy will clip an Angel's wings,

Conquer all mysteries by rule and line,

Empty the haunted air and gnomed mine—

全ての美しさは飛び去って行かないであろうか
冷酷な科学に一触れされるだけで。
かつて天には荘嚴な虹があった。

その横糸もその肌触りもわれわれは知っている。しかし虹は
今やありふれたたいくつな日常の目録の中に納められている。

科学は天使の翼をクリップで止めてしま
すべての神秘を定規と線で征服し

靈氣漂う天と、小人の住む地下を空虚にしてしまおう。

(『レイミア』第二部 二二九—三六行)

「消極的能力」がシェイクスピアの本質であったかどうか、という問
題はここでは立ち入らない。しかしキーツがシェイクスピアの中に見た
この「能力」が大変キーツ的な「能力」であったということだけは確か
であろう。次にこれもまた非常にキーツ的な能力であり、彼がまた大変
シェイクスピア的であった「詩的性格」について見てみよう。

As to the poetical Character itself, (I mean that sort of
which, if I am any thing, I am a Member: that sort distin-
guished from the wordsworthian or egotistical sublime: which
is a thing per se and stands alone) it is not itself—it
has no self—it is every thing and nothing—it has no char-
acter—it enjoys light and shade; it lives in gusto, be it
foul or fair, high or low, rich or poor, mean or elevated—
It has as much delight in conceiving an Iago as an Imogen.
What shocks the virtuous philosopher, delights the camelion
Poet... A Poet is the most unpoetical of any thing in exis-

tenee; because he has no Identity—he is continually in for—and filling some other Body... he is certainly the most unpoetical of all God's Creatures. If then he has no self, and if I am a Poet, where is the Wonder that I should say I would write no more? Might I not at that very instant have been cogitating on the Characters of Saturn and Ops? It is a wretched thing to confess; but is a very fact that not one word I ever utter can be taken for granted as an opinion growing out of my identical nature...

詩的性格そのものについて言えば（もしぼくが何かであるとするなら、ぼくもその仲間であるようなもののことを言っているのだが、またそれ自体で自立しているワーズワスの自我崇高性とは区別され種類のものだが）詩的性格はそれ自体を持たないのだ。つまり自我といったものを持っていない。それはあらゆるものであり、また何物でもない。それは性格を持っていない。それは光を影も受け入れ、それは喜々とした生気の中に生きる。その喜びが清いものであれ、汚れているものであれ、高雅であれ、低俗であれ、豊かであれ、また貧しくとも、卑しくても、高貴でもかまわない。それはイモジェンのことを考えるのとおなじに、イアゴーのことを考えて大きな楽しみを味わう。徳の高い哲学者に衝撃をあたえるようなことでも、このカメレオン詩人を喜ばせる。...詩人とはこの世に存在するものの中で最も非詩的なものだ、というのは詩人は個性を持たないからだ。詩人は絶えず他の存在の中に入って、それを満たしているのだ。...詩人は明かに神のあらゆる創造物のなかで最も非詩的なものだ。詩人が自我を持たないとすれば、そしてぼくがその詩人だとすれば、それはもはやぼくが詩を書いているのではないと言っても

どこに不思議があろうか。詩を書くその瞬間ぼくはサテュルスやオプスの性格を真剣に考え込んでいるといえないだろうか。残念ながら告白しなければならぬが、ぼくが言うどの一言でも、ぼくの生まれつきの個性から生じた意見ということはありえないのだ

（一八一八年十月二十七日リチャード・ウッドハウス宛て）

ここに語られていることは詩人没個性論とでもいうべき考えである。真に偉大な詩人には個性もしくは自我といったものがなく、自由に他の存在へと参入同化しそのもの自身となることにより、内部から対象を描き出そうとするのである。シェイクスピアはこの能力の最高の具現者であるとキーツは見なすし、彼もその性格を共有すると告白している。この彼の「詩的性格」論はキーツ自身の体験例で補強しており、多分にキーツの色彩を有しているといえるのだが、実はこのキーツの論はコールリッジやハズリット等のロマン派のシェイクスピア観の線上に位置していることに留意しておかねばならない。コールリッジは『文学評伝』第十五章でシェイクスピアとミルトンを比較して次のように言う。

While the former (Shakespeare) darts himself forth, and passes into all the forms of human character and passion, the one Proteus of the fire and the flood; the other (Milton) attracts all forms and things to himself, into the unity of his own IDEAL. All things and modes of action shape themselves anew in the being of MILTON: while SHAKESPEARE becomes all things, yet for ever remaining himself.

前者シェイクスピアは、自ら流出して人間性や情熱のあらゆる形相となる。彼はプロテウスのように炎ともなり、とうとうたる流れ

ともなる。後者ミルトンはあらゆる形相や事物を自己へと引きつけ、彼自身の理想の統一へと導く。あらゆる物、あらゆる動作の様式が、ミルトンという存在の中でまったく新しいものへと創り変えられる。これに対してシェイクスピアは、万物に身を変えながら、しかも同時に自己として留まる。(注一)

キーツはシェイクスピアを「カメレオン詩人」に例えたが、コールリッジはその身をいかなるものに変えることのできる海神プロテウスに例える。この共感的想像力説、つまり想像力で他者へと参入同化し、そのもののアイデンティティを得るといふ考えは十八世紀中葉より盛んとなった概念で、シェイクスピアは典型的な想像力の詩人とされるようになった。コールリッジもこの線上にある。彼もまたシェイクスピアはあらゆるものに入り込み、そのものとなってしまふ、と言う。がしかし彼がキーツやハズリットと異なる点は、シェイクスピアは他者にやすやすと同化するにもかかわらず「永遠に彼自身として留まる」と言っていることである。つまりいかなる者(物)に参入同化しても、それらから一切の影響を受けることなく、彼自身で在り続けるというのである。このあたりは、化学変化を助ける触媒のアナロジーを用いて詩人というものに言及した後のエリオットの詩人触媒論を髣髴とさせるものがある。コールリッジはシェイクスピアの持つ性格自体には言及していない。ただ彼自身はまったく他者の影響を受けたいと言っているだけである。ハズリットもまた同様の見解を示しているのだが、彼の場合は一層キーツの立場に近く、シェイクスピア無自我論をとっている。

The striking peculiarity of Shakespeare's mind was its generic quality, its power of communication with all other minds—so that it contained a universe of thought and feel-

ing within itself, and had no one peculiar bias, or exclusive excellence more than another. He was just like any other man, but that he was like all other men. He was the least of an egotist that it was possible to be. He was nothing in himself; but he was all that others were, or that they could become... His genius shone equally on the evil and on the good, on the wise and the foolish, the monarch and the beggar...

シェイクスピアの精神の驚異的特性はその総括的な資質、つまり全ての精神と意志疎通を行う力であり、それ故にシェイクスピアの精神はその中に思想と感情の一つの宇宙を内包しているのであり、一つとして偏見もしくは排他的優越感を有していなかった。彼は他人間と違うところはないし、彼は他人間と同じだった。彼は少しも利己的ではなかった。彼は自己の中に何も持っていなかった。しかし彼は自分でも同時に他の人々でもあり、その彼らになつたであろう人間でもあったのだ。∴彼の天才は悪者も善人も賢者も愚者も、君主も乞食も等しく照らしたのである。(注二)

ハズリットが行つたこの講演の時期とキーツの「詩的性格」への言及の時期がおよその一致を見ることから、キーツはハズリットの講演を直接聴講したか、または彼の友人達の会話からおよその事を知つたか、ともかくハズリットの講演とまったくの無関係ではないかもしれないのだが、両者にはコールリッジとの類似以上のものがあることは確かである。キーツはおそらく他のどの様な詩人よりも他者へと同化しそのものとなる「詩的性格」を濃厚に持っていた詩人であるということができよう。しかしこの彼の言う「性格」には一つのコインの表裏の關係に当たるの

かも知れないが、一つの「欠陥」が潜んでいたのである。それは一切であり、無であるという詩的性格のアイデンティティの問題であった。彼は次のようにも言っている。「部屋の中に人々と一緒にいると、自分の頭が作り出すものについて考えることをぼくがしないで行くなら、ぼく自身が自分自身にもどってくることはなくて、部屋にいる全ての人の個性が私に迫ってくる。その結果ぼくはたちまち消滅する。」(注三) 何かで自己を満たしていないと、逆に他者が彼を侵略してしまうという彼の言葉は、彼のこの様な性格の強烈さの証左であると共に、自己喪失の不安すら孕んでいるのである。

3

キーツのあらゆるものいとも簡単に参入同化することのできる能力は詩人として大変有益な能力ではあったが、その能力故の悲しみと苦しみを彼は味わうこととなる。弟トムは結核を患い、キーツは彼の側にあって苦しむ。彼は手紙の中にこのように記している。「トムの具合が少しでも良くなったと言えれば良いのだが。弟のアイデンティティが一日中ぼくを圧迫して、いたたまれず外出しなければならぬ……彼の顔や声や衰弱した容態から気を晴らすため、ついものを書き抽象的なイメージのなかに飛び込まずにはいられない……名声や詩のことを考えるのは今のぼくには罪悪のように思えるのだが、そうしないとつらくてしかたがないのだ……」(注四) これも彼の「詩的性格」ゆえの苦しみなのだが、また誠実故に彼はトムのアイデンティティの圧迫から逃れようとする自己の罪悪感に一層苦しむことになる。ここで彼が言う「抽象的なイメージ」とは叙事詩『ハイペーリアン』のことである。この時期に彼がミルトンの叙事詩を手掛けていたのは偶然であったのか、それともシェイクスピアと対極の地位を占めるキーツとはまったく異質の詩に挑戦

していたのか、それとも叙事詩を書くことを思いつき、最高のモデルが当然のごとくミルトンであっただけなのか、それはあきらかでない。だがこの『ハイペーリアン』の執筆は彼の詩人としての人生において大変重要な意味を持つように思える。というのはこの未完に終わる叙事詩とその改作で同様に未完のまま放棄されることとなる『ハイペーリアンの没落』は改めて、詩とは何か、詩人とは何か、という問いを彼に問いかけたからであった。

『ハイペーリアン』はギリシア神話に題材をとった作品であり、巨人族の太陽神ハイペーリアンがオリンポス族のアポロにその神の座を明け渡すという主題の叙事詩として計画された。しかしこの叙事詩は若きアポロが神性を得たところで未完のまま放置されてしまう。その理由は詳らかでないが、ミルトンの倒置法ということもその原因の一つであったかも知れない。しかしアポロの神性を得る場面が『ハイペーリアン』の改作で、もはや叙事詩という形式ではなく「夢」という形でわれわれに語りかけられる『ハイペーリアンの没落』の導入部において、「夢の家」が真の詩人へと変容する場面に移し替えられていることから、キーツが詩人とは何かという自己確認、別の言葉で言えば自己のアイデンティティの確認へのヒントを、彼が創り出したアポロの中に発見しからではないであろうか、と考えたくなるのである。

この未完の『没落』では語り手たる詩人が登場し、女神モネタにより真の詩人とは如何なる者が示される。そしてモネタと語り手との間で詩人の意味と意義についてのやりとりがあり、その後は前作『ハイペーリアン』の焼き直しとも言えるべきストーリーが展開する。従って、この『没落』におけるハイライトはまさに女神と語り手との間の、詩人をめぐる応答であり、そこで「詩人」と「夢想家」の違いが明示されるのである。

まづ『没落』においては四種類の人間のタイプ、①「死をかけて同胞

を愛し、この世の巨大な苦悩を感じつつ、この世に善を成す者」②「この世に香油を注ぐ者」としての詩人。③「己が罪の負うべき以上の苦悩を負い、日々悩む」夢想家。④「この世に憩う港を持ち、何事も考えず日々気楽に暮らす者」が、提示される。ここでは②と③が問題となるが、モネタの神殿の高みに登ることのできる真の詩人に関してその女神は次のように定義するのである。

‘None can usurp this height,’ returned that shade,

‘But those to whom the miseries of the world

Are misery, and will not let them rest.

世の悲しみを自らの悲しみとし

常に心の休まらぬ者のみ

この高みを得るのだ。

(『ハイプリーアンの没落』第一歌、一四七―九行)

ここに表現されていることは、一言でいうなら私事を差し挟まない無私の精神とでも言うべきものこそが詩人の必須条件であり、振り返って考えてみればキーツの言う個性を持たない「詩的性格」を指すと言ってよいだろう。一方「夢想家」は詩人とははっきりと異なった正反対の存在であり、モネタは語り手に対しこのように言う。

‘Art thou not of the dreamer tribe?

The poet and the dreamer are distinct,

Diverse, sheer opposite, antipodes.

The one pours out a balm upon the world,

The other vexes it.’

おまえは夢想家の仲間ではないか

詩人と夢想家ははっきりと異なったもの

別のものであり、完全に逆で、正反対

詩人はこの世に香油を注ぎ

夢想家はこれを苛立たせるのだ。

(『ハイプリーアンの没落』第一歌、一九八―二〇二行)

しかし不思議なことに詩人も夢想家も共にモネタの神殿にいる。それは夢想家が「己が罪の負うべき以上の苦悩を負い、日々悩む」がゆえに、それに免じこのモネタの神殿にしばらくの間入ることを許されているという。夢想家もまた他者の苦悩に共感できる者であるゆえである。しかし両者は何が違うのかは明確には語られていない。ただここから辛うじて推測できることは、夢想家はこの世の中に善をなし得ないであろうし、また夢想家は社会に対し、自らを閉ざした存在であろうということだ。ケネース・ミューア(注五)はキーツの『ハイプリーアン』執筆の背景の一つに彼の社会への関心を挙げていますが、確かに頷けるのである。他者に参入同化する人並はずれた能力、何にでも変容する「無」としての自我、これらは素晴らしい詩人としての資質であるが、もしこの能力が他の存在を満たし、しかもその内部でしか働かないとしたら、詩人は積極的な詩的参入者であることを停止し、逆に他者という牢獄に閉じ込められた事にならないであろうか。その時その詩人は百万の心を持ったシェイクスピアとはなれず、哀れな孤立者となるであろう。では他者の中の孤立者とならないためには何が必要であるのか。ここでもう一度キーツの言葉とコールリッジのシェイクスピアに対する言及に立ち返ってみよう。そこからキーツ自身と、コールリッジの考えるシェイクスピアの違いが明らかになるかもしれない。

まずキーツの言葉を思いだしてみよう。キーツは言う。「詩人は明かに神のあらゆる創造物のなかで最も非詩的なものだ。詩人が自我を持たないとすれば、そしてぼくがその詩人だとすれば、それはもはやぼくが詩を書いているのではないと言ってもどこに不思議があるのか。詩を書くその瞬間ぼくはサテュルヌスやオプスを性格を真剣に考え込んでいるといえないだろうか。残念ながら告白しなければならぬが、ぼくが言うどの一言でも、ぼくの生まれつきの個性から生じた意見ということにはありえないのだ。」ここから言えることは詩を書いているときのキーツはもはやキーツでない、ということなのである。

では次にコールリッジに戻ってみよう。彼はこのように言っている。「彼（シェイクスピア）は全てのものになる。がしかし永遠に自己に留まる」と。ここに両者の差はコールリッジにより明らかにされたといえよう。全てのものに変容しながらも「自己」を確保し続けたシェイクスピアと、他者に同化し、もはや自分が詩を書いているのではないと言うキーツの差は真の詩人と夢想家の差として徐々にキーツに理解され始めたのである。あらゆるものに参入同化しながらも、常に宇宙の中心としての自己を確保したのがシェイクスピアであった。キーツは参入した他者に同化し、その目から見える宇宙を描いたのである。しかしシェイクスピアはその同化した自己なる他者を外から彼自身の詩人の目でしっかりと見つめていたのである。彼が複眼の詩人と言われる由縁である。

4

二つの『ハイペリアン』は共に未完のまま放棄された。放棄に際しキーツは、ミルトンにとって生であるものは、彼にとっては死を意味する。だから純粋な英語を守らなければならないと言ひ、チャタトンに言及する。言うまでもなくキーツはチャタトンの背後にシェイクスピアを

見ていたのであった。

キーツの詩人としての一生はシェイクスピアに導かれた一生であった。彼は数多くの偉大な英国詩人を手本とした。詩人としての人生のスタートを切るにあつたのはエドモンド・スペンサーにひかれた。チョーサー、ミルトンも彼が心から愛した詩人達であった。同世代の詩人としてはワーズワス、コールリッジの偉大さを認めていた。しかし彼は決して無条件でこれらの詩人を認めただけではない。先に引用したキーツの手紙からも分かるように彼らの偉大さを認めながらも、ある部分では大變批判的に見ているのである。しかしシェイクスピアに関しては例外であった。キーツは彼の全てを認め受け入れようとしたのであった。彼はごく初期の詩『眠りと詩』の中で自らの詩人としての人生を予言して、「最初の私はパンとフロラーの世界を通るであろう」と言った。そしてロマンスの世界の喜びに別れを告げ「人間の心の苦悩と葛藤の待つ、より高貴な人生」へと至るであろうことを自分に言い聞かせている。もちろんそのような世界とはシェイクスピアの世界であり、彼が究極的にシェイクスピアを目標としていたのは確かだ。しかし最終的にキーツがドラマの分野でシェイクスピアと比肩する作品を実際に書いたかと言えば、それは否と言わねばならない。だが叙情詩においては大いに成功していると言えるであろう。彼のオード群はその白眉であることに異論はない。それはキーツのいわゆる「詩的性格」、それもまさにシェイクスピアとオーバラップする部分において真にシェイクスピアに匹敵するものを書き得たのだ。

キーツは二十五才の生涯を病を得てローマで終えた。愛も名声も彼の死の床にはなかった。

注

キーンからの詩の引用はすべて M. Allott(ed.), *The Poems of John Keats* (1970) によった。またキーンの手簡からの引用は M. B. Forman, (ed.) *The Letters of John Keats* (3rd. edition, Oxford Univ. Press, London, New York, 1947) による。以後 *Letters* の表記は略

詩人ということ——キーンの場合

- (一) S. T. Coleridge, *Biographia Literaria* (J. Engell and W. J. Bate ed., *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*, 2 vols: Princeton University Press, 1983) II, 27-8.
- (二) W. Hazlitt, *Lectures on the English Poets & The Spirit of the Age* (C. M. Maclean ed., Everyman's Library, New York, 1967) p. 47.
- (三) *Letters*, 72.
- (四) *Letters*, 228.
- (五) K. Muir, "The Meaning of 'Hyperion'." *John Keats: A Re-assessment* (Liverpool University Press, Bungay, Suffolk, 1969)

(敬請 注意)